

産業技術総合研究所
主任研究員 吉見 雅行

何が起きたか：

- 日奈久断層の西側に強い揺れ，断層変位（予測されていた）
- 地震動による広範な被害@古い建物
- 断層変位による多くの被害@インフラ，建物

大分県への提言：

- 科学的知見に基づく地震動予測を活用すべき
- 断層変位，地殻変動の影響も考慮すべき
- 高い地震発生確率が周知されてきた八代地域でも地震被害は避けられなかった。何が問題であったかを情報収集し，他山の石として欲しい。

3

（２）医療について

大分大学医学部附属病院

高度救命救急センター長 安部 隆三

災害マネジメント総合支援センター長
糸永 一朗

4

【団体名：大分大学医学部附属病院】

大分大学医学部附属病院が行った医療支援



↑ 2026年7月29日、熊本へ出発するDMAT

2026年7月28日午後16時27分発災

7月28日、20:32、日本DMAT 1次隊派遣要請

九州（沖縄を除く）から64隊、うち大分県から13隊

7月29日、9:00；本院から1隊（6名）派遣、7月31日まで活動

* 八代更生病院で夜勤業務

7月29日、16:01、DMAT 2次隊派遣要請

九州、中国、四国から100隊、うち大分県から6隊

8月7日、12:10、DMAT 5次隊派遣要請

九州から20隊、うち大分県から4隊

8月9日、7:10；本院から1チーム（4名）派遣、8月12日まで活動

* 八代北部地域医療センターで医療支援

8月1日、JMAT派遣開始

8月22日、9:00；本院から1隊（4名）派遣、8月25日まで活動

8月25日、8:00；本院から1隊（4名）派遣、8月28日まで活動

* 八代地区地域調整本部で統括JMATを担当

災害支援ナース派遣

8月3日～6日：1名、8月6日～9日：1名、8月15日～18日：1名、8月21日～24日：1名

* 避難所支援；体調確認、健康相談、感染対応、物品管理、環境調整など

大分県への提言

引き続き、県内医療機関に対し、EMISへの情報入力の徹底を働きかけていただくようお願いします。

5

（3）福祉について

大分県社会福祉協議会
森 美菜子

6



<左上写真>

車中泊避難者の車両。
日中は車内が高温になるため自前で日よけを準備されていた。
人工透析を受けている男性と妻が過ごしていた。

<下段写真>

小川防災拠点センターの写真
体育館の床に雑魚寝状態が約10日間続き、その間掃除なども特にされておらず、埃が溜まっていた。
支援者の拠点、会議室等もなく情報共有がしづらい状況での支援だった。



よかった点

- ・ 保健医療福祉チームとの連携が密に取れた(特に医療)
- ・ 在宅避難者、車中泊避難者、福祉避難所への支援も実施できた
- ・ 社協と連携した支援が実施できた

課題点

- ・ 避難所運営の統括が不在で運営の基礎が成り立っていない
- ・ 個人情報とデータ共有の壁が超えられない
- ・ 物資運搬のラストワンマイル

大分県への提言

支援者の視点

情報共有システムの構築

自治体と支援者が共通で使用できる仕組みを作してほしい。

被災者の視点

安心できる避難場所の提供

避難者個々人の状況に対応できる場所や物資の整備・提供を進めてほしい。

(4) 避難所について

NPO法人リエラ
代表理事 松永 鎌矢

9



[令和8年熊本地震 活動報告]

2026.10.1

NPO法人リエラ 代表理事 松永鎌矢

リエラの活動

活動目的 普段から支え合える地域を目指して（Re area=リエラ）

法人連絡先 大分県日田市隈2丁目1-9

被災地支援

令和2年7月豪雨支援



防災活動支援

サバイバルキャンプ



移住定住支援

移住者交流会



本日のテーマ

TKB（K：キッチン）

被災者の食事

1日3回＝90回／月の頻度の高い被災者支援の領域であるものの、餓死しない・温かい食事をボランティアが作ってくれた・物資が届いている等のふわっとした経験則から曖昧な支援になっている。

被災者の食事



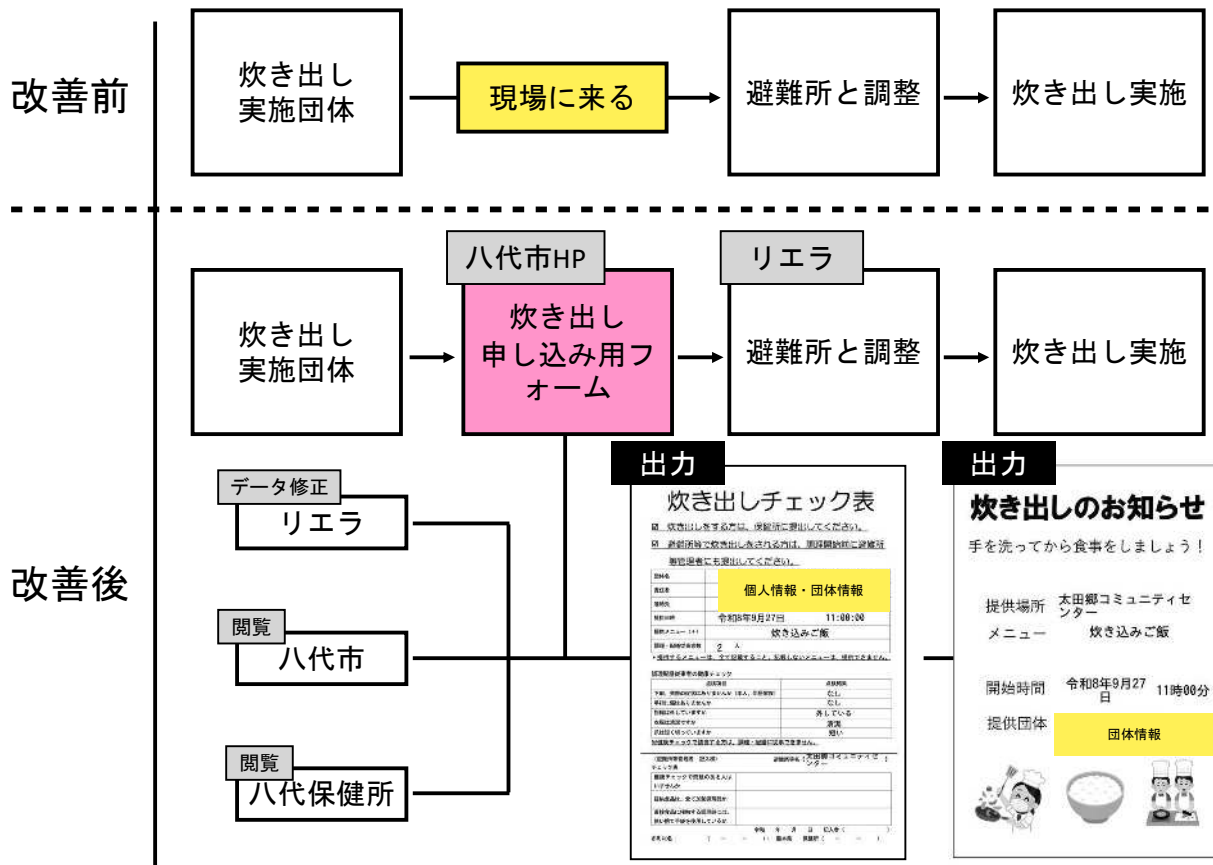
現地の様子



活動内容（熊本県八代市）

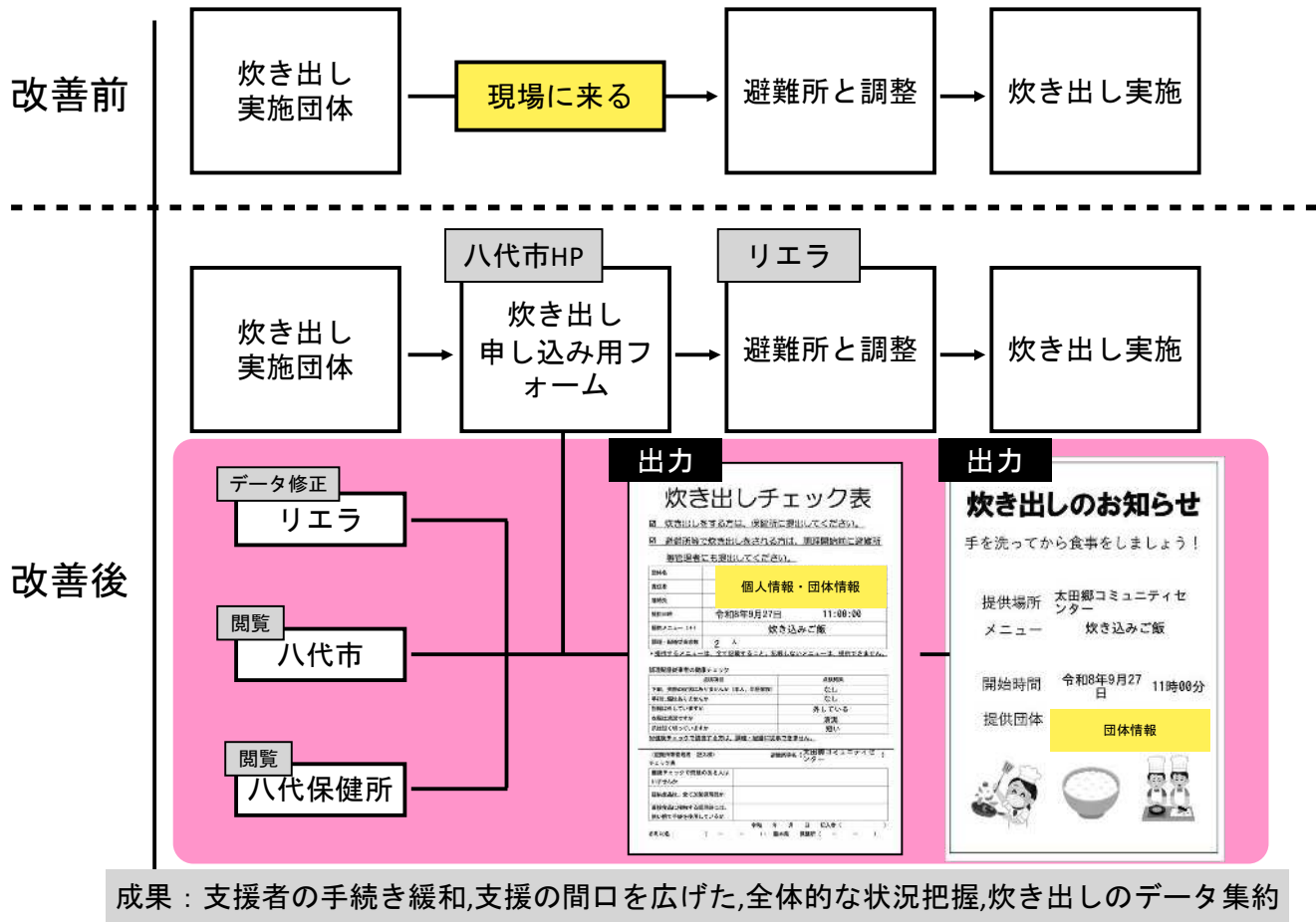


熊本県八代市における炊き出し調整窓口のスキーム



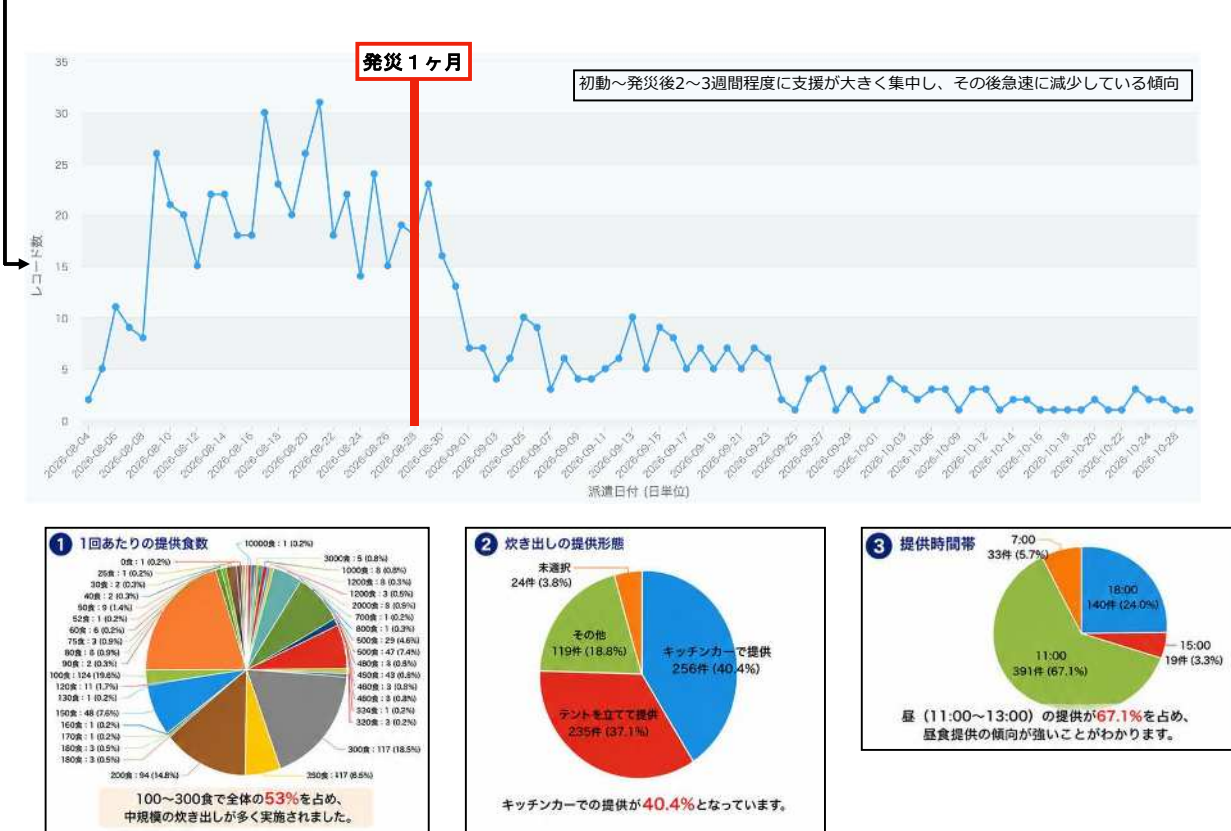
成果：支援者の手続き緩和、支援の間口を広げた、全体的な状況把握、炊き出しのデータ集約

熊本県八代市における炊き出し調整窓口のスキーム



熊本県八代市における炊き出しの実績（無償ボランティア）

調整件数：延べ 788件（指定避難所及び団体からの申請分に限る）：9/29時点



被災者の食事の移り変わり（イメージ@八代市）

	～ 1 週間	～ 2 週間	1ヶ月目	2ヶ月目
朝食	備蓄品	支援物資	支援物資	支援物資
昼食	備蓄品	炊き出し	炊き出し	支援物資
夕食	備蓄品	炊き出し	業者発注	業者発注

19

熊本県八代市における炊き出しの振り返り

炊き出し支援	初動～発災後2～3週間程度に支援が大きく集中し、その後急速に減少傾向
実施時間帯	昼の炊き出しが圧倒的に多く、夜食・朝食は相対的に少ない構造
提供規模	1回あたりの提供規模は「100～300食」が中心（中央値250食）
提供先	支援先が一部の主要避難所に集中し、特に上記提供規模に対する避難者のいる避難所に支援が集中する
提供メニュー	「ご飯・丼もの」が強く、特にご飯・丼＋汁物の組み合わせは、避難所での食事として提供しやすい構成
提供形態	キッチンカーとテント型が二大方式で、キッチンカーは全体の4割を占める

熊本県八代市における炊き出しの振り返り（主観）

課題（１）

＜作り手ともらい手の気温差＞

作り手：暑い（屋外調理）

もらい手：寒い（空調完備の屋内での食事）

課題（２）

＜１食にかける想いの違い＞

作り手：この１食が大事（質より量）

もらい手：３食、もしくは１週間が大事

課題（３）

＜指導はあるが理想はない＞

災害時の炊き出しは許可等ではないため、お願いベースになるものの、食品衛生上の提供NGなものはあるが、被災者が健康かつ元気にいられる理想の食事は誰も指導しない

21

大分県への提言・今後の（避難者の食事に関する）仕組み

目標の設定

・餓死しないのか、震災関連死がでないのか

温かい食事を提供する仕組み

・セントラルキッチン化で効率化・漏れない支援を目指す
・支援者登録を行い、無償炊き出し頼みではなく救助費で対応できる仕組み

被災者のご飯のイメージアップ

・緊急期（発災３日以内）は除いて、被災者の贅沢は認められないのか。
・量より質にこだわる食事支援のあり方の模索及び人材育成

被災者の食事は結構曖昧になっていませんか？

22

（５）防災DX、被災者台帳について

サイボウズ株式会社
柴田 哲史

23



24



柴田 哲史 (Satoshi Shibata)

サイボウズ 災害支援チーム リーダー
DXアドバイザー (東京都調布市、青森県)

1995  Microsoft

2015  Cybozu

2020  災害支援プログラムを開始

サイボウズ災害支援チーム公式サイト <https://saigai.cybozu.co.jp/>

25



2011年から**40**の被災地でIT支援

それぞれの被災地に合わせた支援

2011年	東日本大震災	2019年	千葉、長野
2012年		2020年	福岡、熊本
2013年	東京(大島)	2021年	静岡、佐賀、広島
2014年	群馬、広島	2022年	宮城、新潟、静岡
2015年	茨城	2023年	石川、静岡、茨城、福岡、 埼玉、秋田、福島
2016年	熊本、北海道、岩手	2024年	石川、山形、神奈川
2017年	福岡、大分、秋田	2025年	鹿児島、秋田、静岡、八丈島、 大分
2018年	広島、北海道	2026年	 熊本、千葉

26

熊本でのkintone活用状況

現在**16** 団体で活用中

- └ 熊本県、熊本市、宇土市、宇城市、氷川町、八代市
- └ DWAT、熊本県社協、沖縄県社協、NPO 7 団体

八代市での支援内容

- ① 災害対応システム（健康調査アプリほか）
- ② 井戸復旧プロジェクト
- ③ 被災者情報の一元化



27



八代市 災害対応システム



28

八代市の課題は、能登の自治体と同じ

能登の課題を紹介

①手書きの避難者名簿



②二次避難先の行方が不明



③医療介護情報が不明



④個人情報の壁が邪魔



29

八代市災害対応システム

情報を入力する（現場・外部）

- 避難所**
避難所の状況報告
(クロノロ・チェックイン)
- 避難者**
避難者情報の登録
(避難所・車中泊・在宅避難)
- 健康調査**
健康状態の記録
(住民調査)
- お問い合わせ**
外部からの連絡・相談
(お問合せ)
- 活動記録**
職員・支援団体の活動記録
(日報・タスク管理)

kintoneで一元管理



- ✓ 情報を集約
- ✓ リアルタイムで共有
- ✓ 正確な状況把握
- ✓ データを蓄積・活用

使用するアプリ（9アプリ）



スペース名：熊本地震（八代市）
(サイボウズ災害支援チームのkintoneを活用)
<https://saigai.cybozu.com/>

本部・関係者が活用する

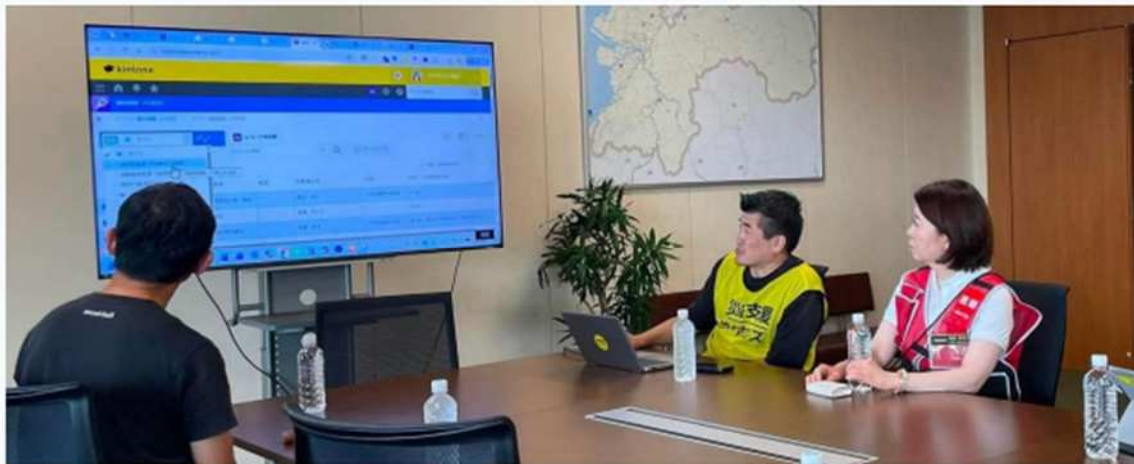
- 状況を見える化**
避難所・避難者・健康・問合せなどを
一面面で把握
- 意思決定を支援**
データに基づき、優先対応や
資源配分を判断
- 支援につなげる**
必要な支援が必要な人へ
迅速につなぐ
- 記録・報告を効率化**
議事録・日報・問合せを自動要約し、
報告業務を削減

災害対策本部・各部署・保健師・支援団体

30

八代市小野市長に健康調査アプリをデモ

👉 「災害時だけでなく平時の見守りにも活用していきたい」



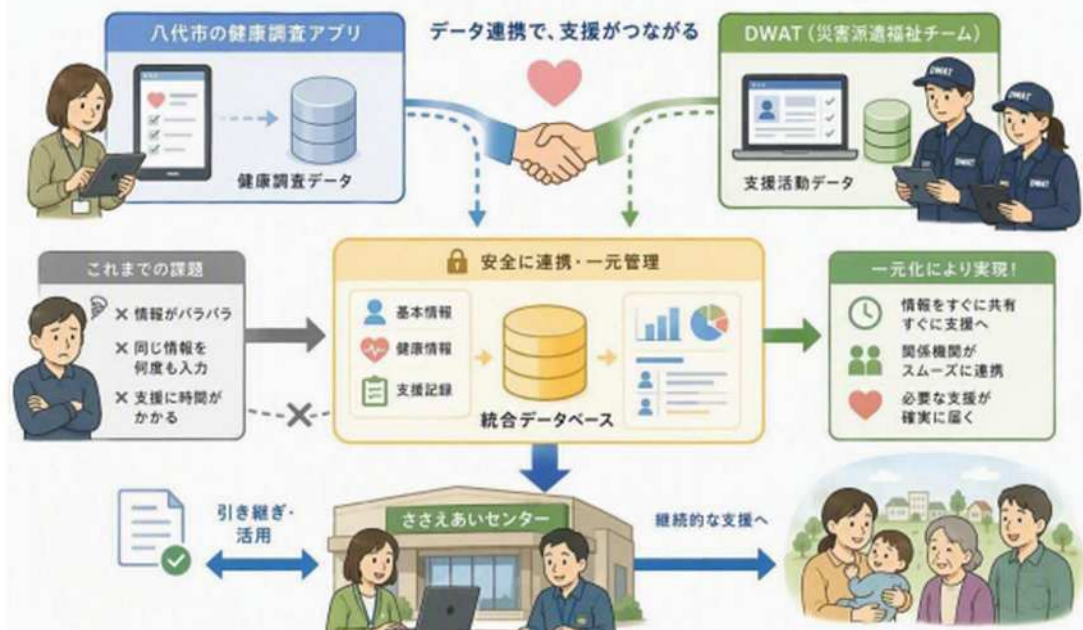
31

保健師へ健康調査アプリの使い方説明



32

DWATの調査データも統合



33

健康調査アプリを氷川町へ展開 (NHKニュース、8/11放送)

熊本地震 保健師が在宅被災者から聞き取り 氷川町



34



八代市 井戸復旧プロジェクト

35

八代市 井戸復旧プロジェクト

熊本地震発生



井戸利用世帯が多い八代市



約**4,400**世帯の
井戸に被害



関係者が同じ情報を見る



実現したいこと

- ✓ 被害状況を一目で把握
- ✓ 優先順位を判断
- ✓ 関係機関が連携
- ✓ 復旧を加速

36

井戸洗浄業者の皆さんへアプリの操作説明会



37

八代市 被災者情報一元化



38

八代市 被災者情報一元化



39



提言：災害対策本部DX

40

提言① 発災前にシステムを習熟すべき

👉 平時から関係者が習熟しておくことが重要

? なぜできていないのか → 災害時用のシステムだから

👉 平時利用できる被災者台帳的な仕組みが大切

👤 福祉、地域包括ケア、見守り支援



41

参考) 要配慮者DBの活用 (徳島県、24時間TVコラボCM)



30秒版



3分版



サイボウズ×徳島県 防災活動

防災にはITの力が役立ちます

42

提言② 発災前に個人情報勉強会を実施すべき

👉 災害時のデータ連携で一番困るのは、
命よりも個人情報を守ることを優先する職員が存在。



43



44

Thanks !

45

(6) 物資拠点について

沖縄県知事公室消防防災対策課
主査 嶺井 康太郎

46

物資拠点の運営

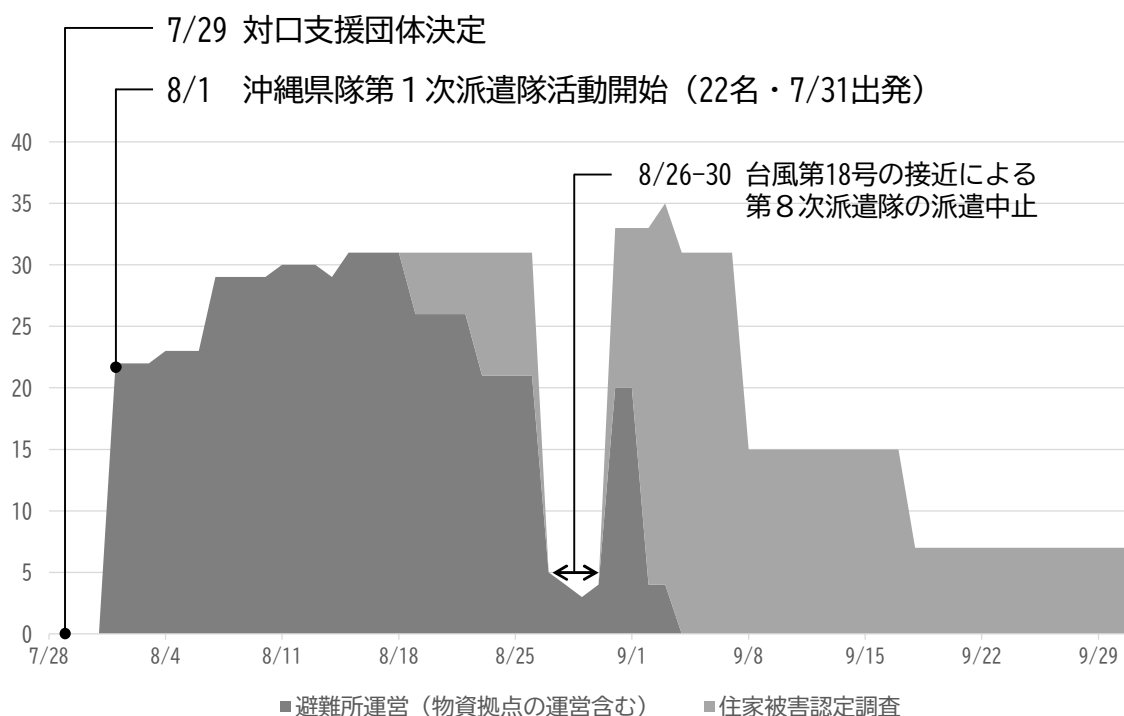
令和8年熊本地震に関する支援団体報告会



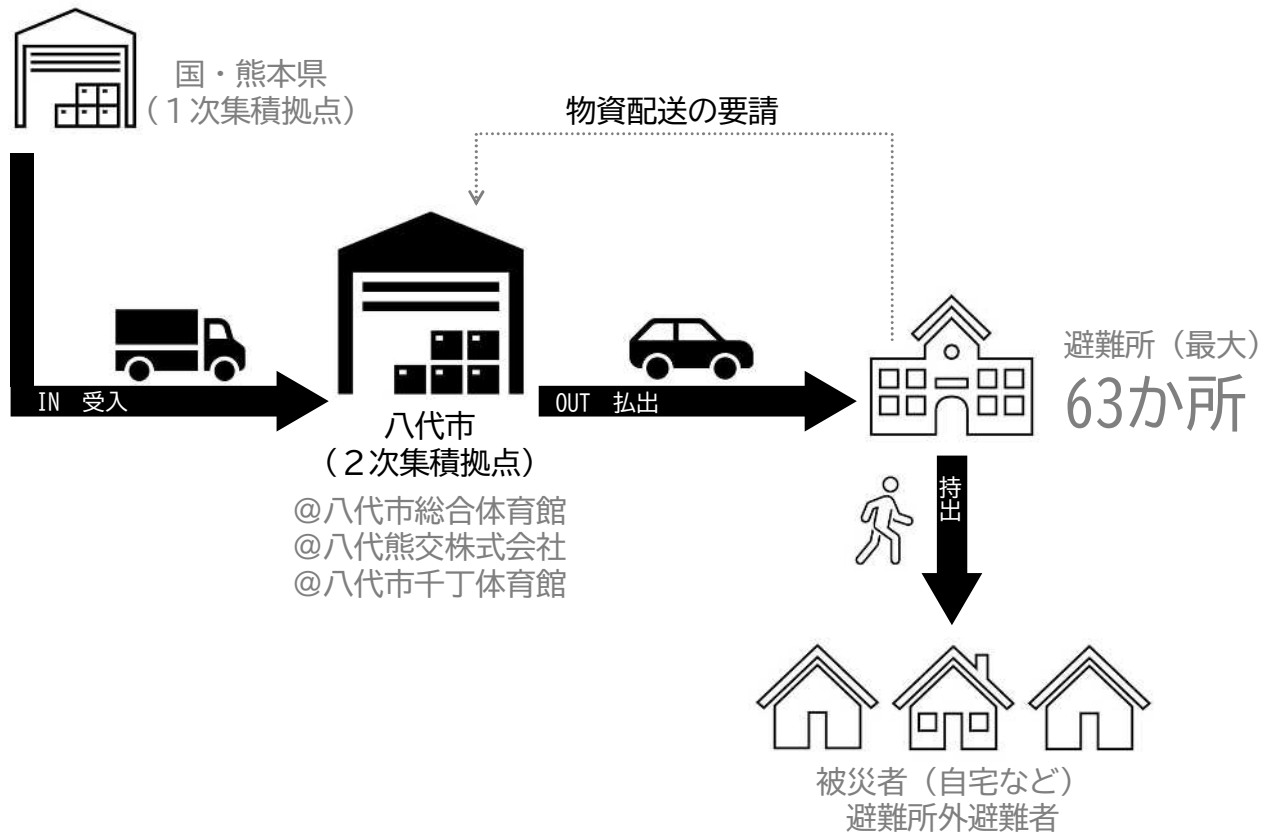
47

1 本県の対口支援（熊本県八代市派遣分）

 1269名（のべ人数）

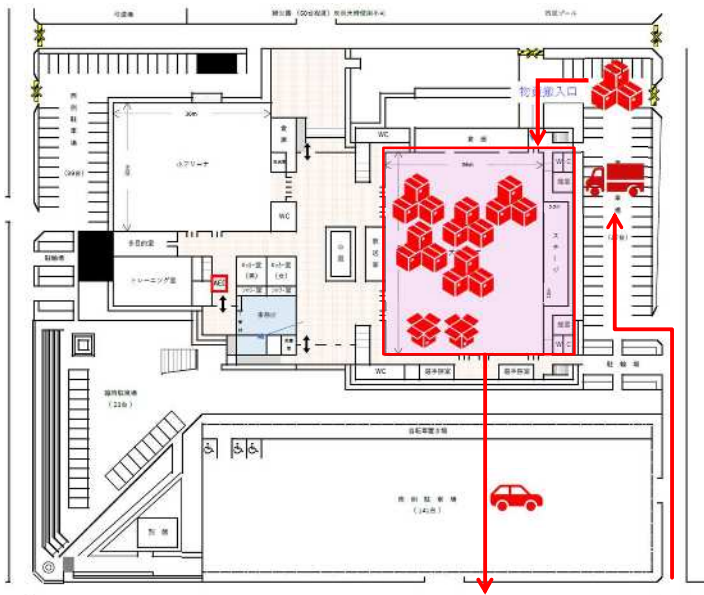


2 物資輸送のながれ（熊本県八代市）



沖縄県 / 令和8年熊本地震に関する支援団体報告会 49

3 物資拠点の運営（熊本県八代市）



STEP1 (Aチーム) 物資の受付・数量管理



STEP2 (Bチーム) 倉庫 (大アリーナ) 搬入

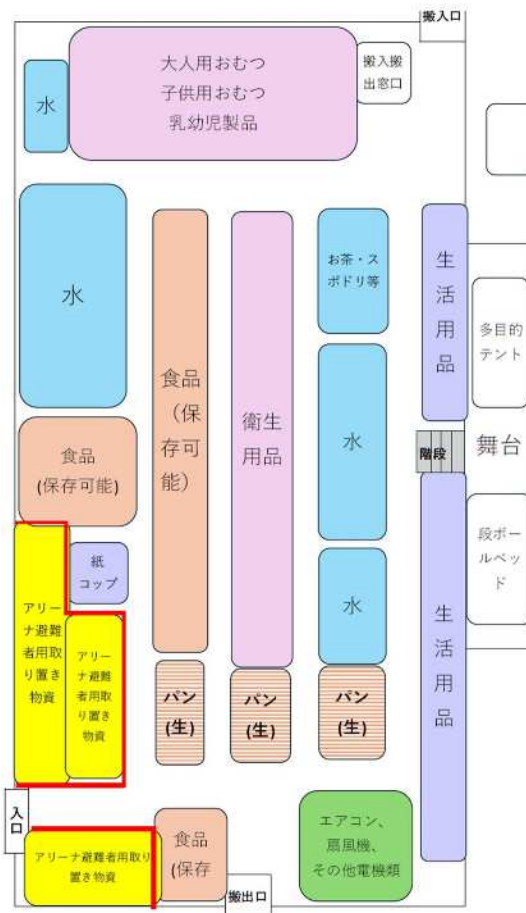
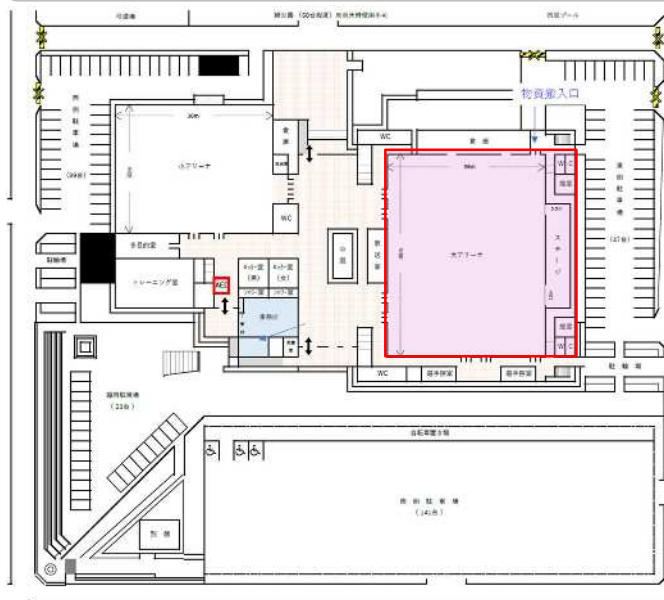


STEP3 (Cチーム) 在庫管理



※運送事業者への業務引継ぎ直前の作業工程
※物資の搬出は八代市にて管理

沖縄県 / 令和8年熊本地震に関する支援団体報告会 50



4 物資拠点の課題

物資の全体量が把握困難

- ・当初予定されていた物資拠点が被災による点検のため使用できない事態
- ・八代市総合体育館が満床となり、急きょ新たな物資拠点を開設
- ・市内に物資拠点が散在し、物資の全体量が把握困難となる

アクセスできない連絡網

発災直後に、八代市職員にてロゴチャットによる物資要請の連絡網が確立されたため、応援職員が閲覧・要請できない

非効率なラストワンマイル

発災直後より、各避難所から要請を受けるたびに八代市職員が配送
避難所間で物資の遅配や欠配が生じ、避難者の不満に直結

管理できない在庫物資

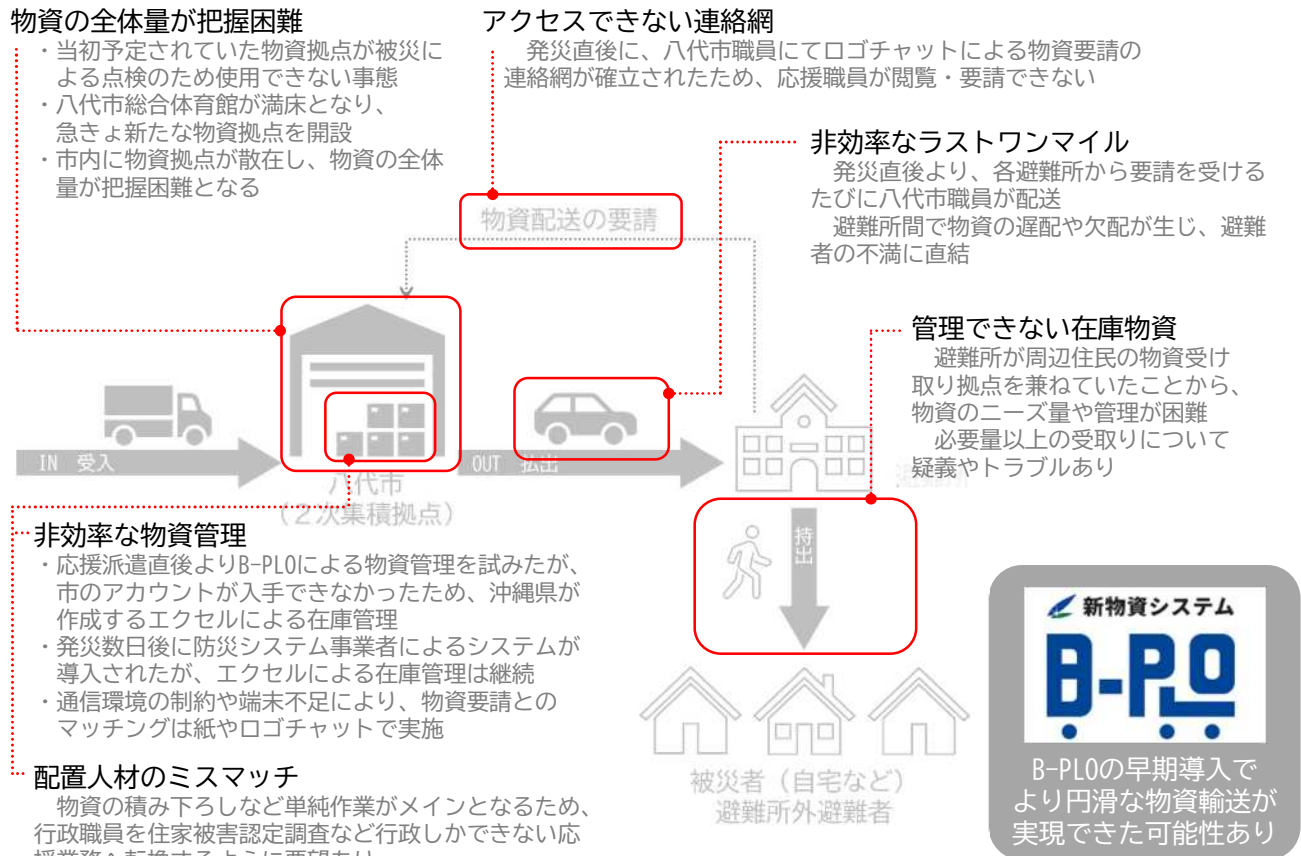
避難所が周辺住民の物資受け取り拠点を兼ねていたことから、物資のニーズ量や管理が困難
必要量以上の受取りについて疑義やトラブルあり

非効率な物資管理

- ・応援派遣直後よりB-PL0による物資管理を試みたが、市のアカウントが入手できなかったため、沖縄県が作成するエクセルによる在庫管理
- ・発災数日後に防災システム事業者によるシステムが導入されたが、エクセルによる在庫管理は継続
- ・通信環境の制約や端末不足により、物資要請とのマッチングは紙やロゴチャットで実施

配置人材のミスマッチ

物資の積み下ろしなど単純作業がメインとなるため、行政職員を住家被害認定調査など行政しかできない応援業務へ転換するように要望あり



(7) 住家被害認定調査について

佐伯市防災局防災危機管理課
総括主幹 松山 美穂

55

【団体名：佐伯市防災局防災危機管理課】



↑八代市役所職員と方針について打合せの様子 8/3



↑罹災証明受付窓口 8/7



↑福井県引継ぎの様子 8/11

56

【団体名：佐伯市防災局防災危機管理課】



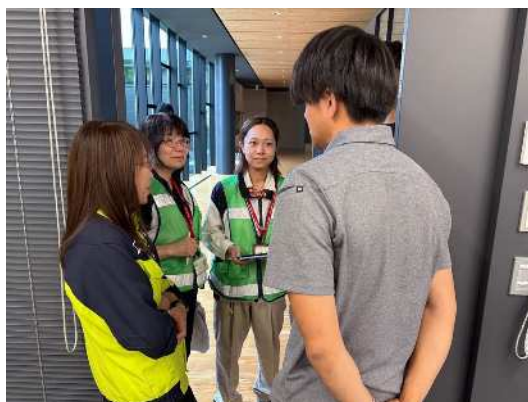
↑被害認定調査チーム 朝礼の様子



↑調査の段取り協議



↑調査について八代市資産税課長と協議



↑調査結果について協議

57

【団体名：佐伯市防災局防災危機管理課】



↑北九州市 引継ぎの様子



↑北九州市 QJTの様子



↑調査に必要なグッズなども引継ぎする



↑大分県引継ぎマニュアル作成協議（チェック班）

58

うまくいったこと：

- 初めての派遣でしたが周りの方たちが協力的で助かった
- 佐伯市がR7年度から導入している被害認定調査システムを使用
- 協議や打合せ、調査方法がスムーズに行われた

うまくいかなかったこと 又は 大分県への提言：

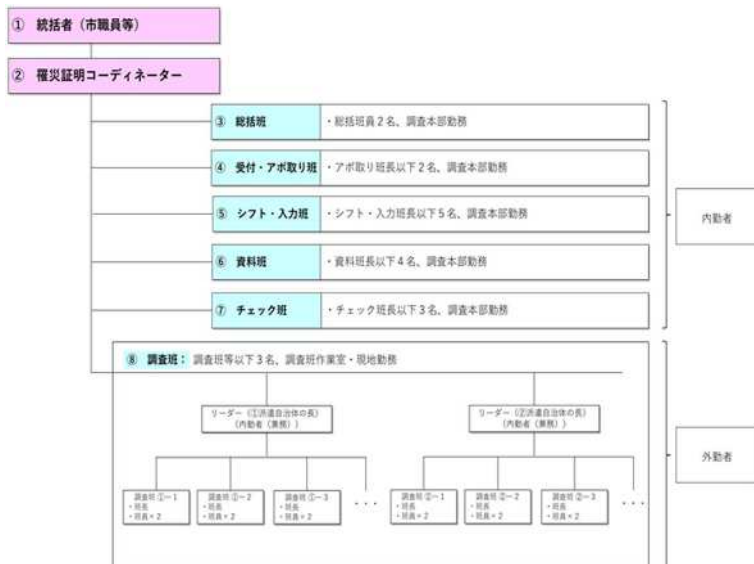
- 派遣期間が短いため習得すると帰還してしまう
- 研修には時間がかかるため、事前学習など準備が重要
- 支援経験がある自治体はしっかり引継ぎができる体制で応援に来るが、ほとんどの自治体は引継ぎができない体制

大分県への提言：支援に入る職員には罹災証明受付・被害認定調査・被災者支援制度についての知識が必要です。

県内での引継ぎ & OJTは、効率よく調査を進めるために重要です。

※OJT（On-the-Job Training）は、現場での実務を教材にして行う教育手法 59

● 調査に関わる業務・組織等



●人員数（応援職員100名を想定、内勤各班は状況により増員）

区 分	人員数等	
③ 総括班	班員×2	2
④ 受付・アポ取り班	班長×1、班員×7	8
⑤ シフト・入力班	班長×1、班員×1	2
⑥ 資料班	班長×1、班員×1	2
⑦ チェック班	班長×1、班員×2	3
計		17
⑧ 調査班	（班長×1、班員×2）×班数	3×28班
計		84
総計		100

(8) まとめ

大分大学減災・復興デザイン
教育研究センター
鶴成 悦久